

基本方針

(1) 特色ある学校づくり、地域連携、コミュニティスクールについて

広大な敷地を活かした緑あふれる自然豊かな環境は、古堅南小学校の大きな特色であり、多様な木々の木陰は子どもたちの遊び場としてだけでなく、観察などの教育の場として活用されています。

現在の教材園の面積は約 2,400 m²（約 726 坪）と大変広く、子どもたちが苗を植え、育てた野菜を収穫するなど、豊かな体験活動を展開しています。今後は、教材園の一部地域開放なども視野に入れ、地域住民との交流の場としても活用できるよう、校舎との一体的な動線計画を取り入れた建築計画が必要と考えます。具体的には、教材園から近い場所に、家庭科室、地域連携室が連動できるよう配置を行うことで、栽培→収穫→調理→食事といった一連の流れを体験できる施設となり、食育として生産の大変さや食べ物の大切さなどの体験学習が可能となります。

地域連携室は主に校区内住民の利用を想定しており、P T A 活動などの夜間利用や車での来校が多くなることが予想されるため、近接した場所に駐車スペースを整備し、校舎を經由せずにアクセスできる独立した動線を計画します。そのほか、各種地域ボランティア活動での活用や、地域住民や家族を招いた交流活動、放課後の子どもの居場所づくり事業での活用などを想定しています。室内には、様々な活動に対応できる使い勝手の良い大広間、トイレや給湯室、倉庫などを整備します。



現在の古堅南小学校 広い敷地を活かしたグラウンドや教材園、豊かな自然環境

(2) 正門及び、進入経路整備の検討、防犯、事故防止について

古堅南小学校は北西側に村道古堅 28 号線、北東側に村道大木古堅線、南側に県道 16 号線が接道しています。現在正門は直接建築基準法上の道路に接しておらず、敷地内歩道（通称ハイビスカス通り）に面しています。この敷地内歩道は車の乗り入れがない安全な通学路として利用されていますが、そこに接道する県道 16 号線及び大木古堅線は、登下校時には送迎者の一時停車が多く、渋滞が起これ、児童の安全な通学への影響が懸念されています。

現在古堅南小学校では徒歩通学を推奨しており、基本的には車での送迎を禁止しているため、送迎のための車寄せや駐車場の整備は、より一層の混乱を生じさせる可能性があると考えます。したがって、運用面での検討、周知活動を促進させることで、登下校時の安全を確保することを目指します。

正門の配置（向き）については、南向き（県道側）とするメリットとして、外部から正門の位置がわかりやすくなり、アクセス性の向上が見込まれます。東向き（ハイビスカス通り側）の場合は、現在のような形態で利用した場合、車両の乗り入れが無いため安全ですが、正門の位置がわかりにくいといった意見もありました。北東向き（村道側）は前面道路や歩道が狭く、安全に正門を設ける場合は敷地側へセットバックを行うなどの工夫が必要となります。

敷地内歩道（ハイビスカス通り）については、現状のように徒歩での安全な通り抜けを確保し、小学校から未来児童館への安全な動線を残します。

敷地内においても、歩車分離を基本とした動線計画を行い、児童と車両の接触が極力おこらない計画とすることで、安全・安心な学校づくりを目指します。

また、建物や建造物等による死角を極力少なくし、教職員の目が隅々まで行き届きやすいよう視認性に配慮した計画とします。どうしても死角となってしまう箇所には防犯カメラを整備し、南の森などの植栽計画においても視認性には十分配慮した計画とし、暗がりの少ない、明るく安全で活気のある学校づくりを目指します。

実施設計段階においては、上層階や段差からの転落防止対策の詳細など、安全面に配慮した設計とし、防犯カメラの設置箇所の調整等を行い、様々な人が集まる学校施設のセキュリティ強化の検討を行います。



県道側



ハイビスカス通り側



村道側

(3) ハイビスカス通りの活用について

敷地の東側には徒歩専用通行線として地域に開放されているハイビスカス通りがあります。現在の正門はこのハイビスカス通りに面しており、車の通行がない安全な通学路として重宝されています。本計画では、今後のハイビスカス通りの運用について、現在のような歩車分離のとれた歩道としての活用、接道する県道及び村道の送迎時の渋滞緩和のための車路及び寄り付きの整備、各行事の際や避難施設として多くの人が集まる施設としての駐車台数の確保などを反映させた複数のプランを作成し、比較検討を行い、整備計画を策定します。



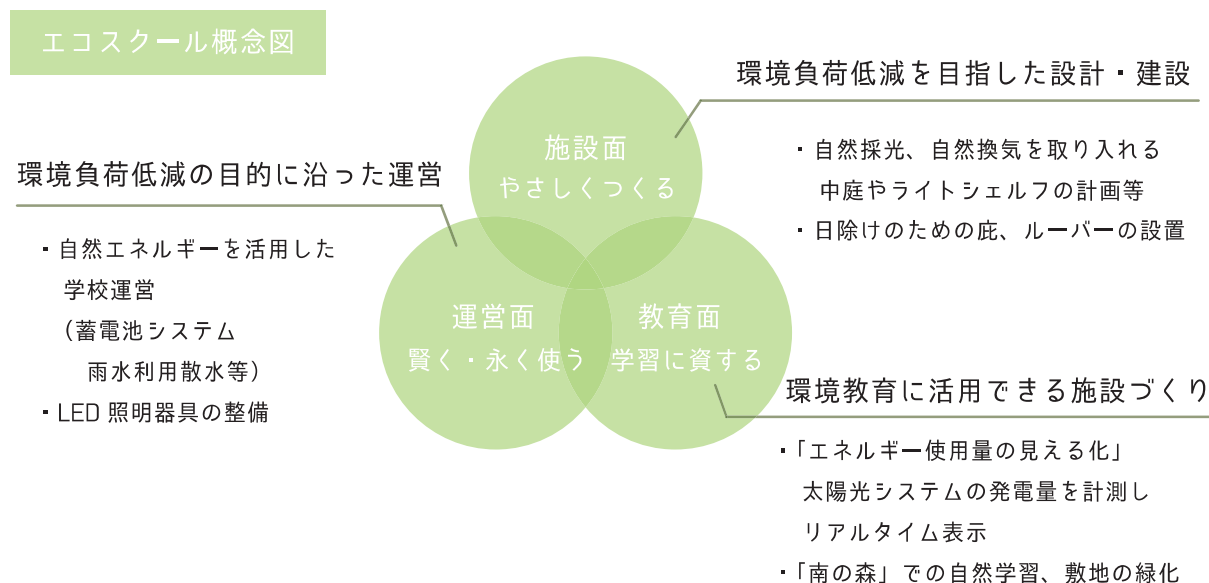
現在のハイビスカス通り

(4) 人口増加への対応について

現在整備が進められている読谷村大湾東土地区画整理事業に伴い、古堅南小学校区の人口増加が見込まれています。基本計画業務に先立って行われた小学校校舎改築等準備計画にて、「土地区画整理事業における計画人口」「読谷村人口ビジョン」「2015 国税調査」の人口データを基に、将来児童数の予測を行った結果、2045 年に児童数がピークをむかえ、その後は徐々に減少していくことが推計されました。この推計を基に、2045 年に見込まれる最大児童数から、普通学級数を 24 クラスとして計画を進めます。(P 11 参照)

(5) エコスクールの導入について

エコスクールとは、環境を考慮して整備された学校施設のことです。地球温暖化対策が喫緊の課題となっている中、学校施設においても環境に配慮した施設としてエコスクールの整備が求められています。エコスクールは、環境負荷の低減に貢献するだけでなく、児童生徒の環境教育の教材として活用することもでき、さらには地域の環境教育の発信拠点としても先導的な役割を果たすことができます。エコスクールの整備には以下の 3 つの点に留意することが必要です。



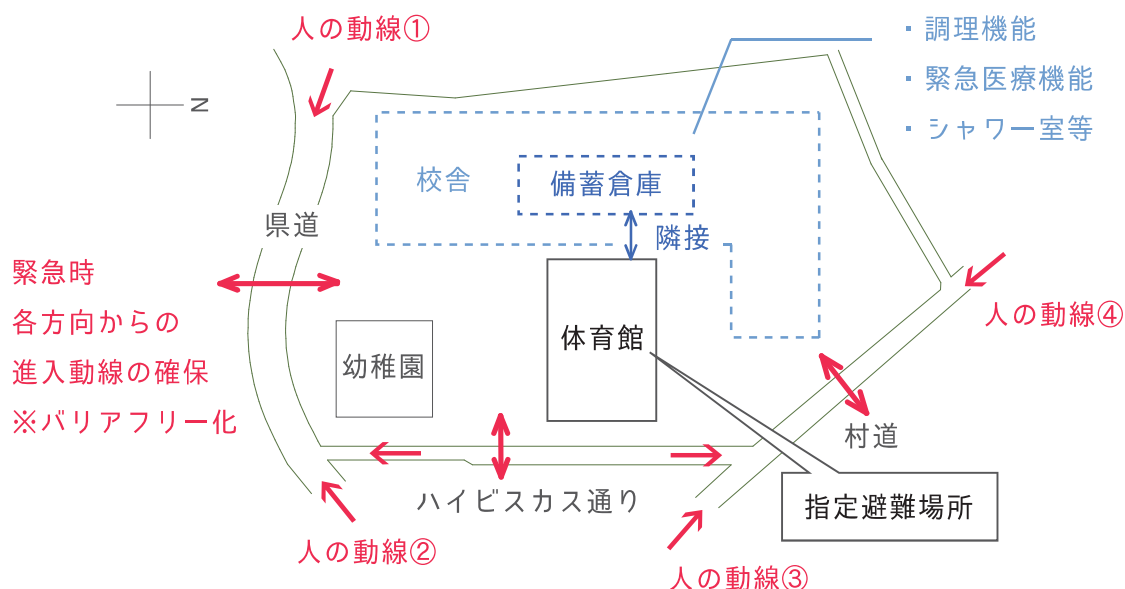
周辺市町村での事例では、屋上に太陽光発電パネル、昇降口付近に発電量を掲示できるモニターを設置することで教育目的として活用している学校や、ビオトープをつくり地元の植生について学習できる環境を整備している学校などがあります。

古堅南小学校においては、敷地の緑化と自然学習の場としての「南の森」の整備や、省エネルギー対策としてLED照明器具の整備、日除けのための庇・ルーバー・バルコニーの設置を計画しています。また、雨水利用の導入などを検討し、エコスクールの概念を取り入れた学校施設を目指します。

(6) 災害時の避難場所、防災拠点としての位置付けについて

古堅南小学校は「災害時避難場所」に指定されています（読谷村地域防災計画）。読谷村地震・津波ハザードマップによると、古堅南小学校は津波浸水予測範囲から外れており、津波災害時には浸水予想場所である沿岸部からの避難が見込まれるため、大勢の方を受け入れる避難施設としての整備が望まれています。

関係各課との資料・情報の共有、個別ヒアリングなどを行い、避難施設・防災拠点としての学校施設整備の計画を行います。具体的には、備蓄倉庫の配置、避難時における調理機能を持つ家庭科室の整備、保健室の緊急医療機能（応急処置等）の強化、地域連携室の役割、シャワー室のあるプールや一時避難場所となる体育館との連携、各避難経路等の検討を行い、防災機能の向上にむけて計画を進め、詳細を実施設計にて検討します。



(7) 新世代型学習空間、教育情報化への対応について

IT革命の一環として、インターネット等を活用した授業など、ITを活用した授業のより一層の推進を図るための教育基盤の整備が必要になります。

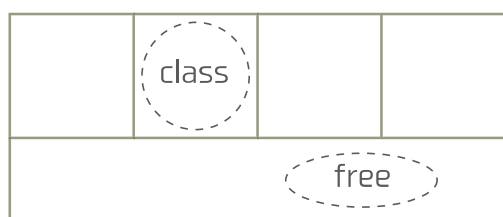
実際の整備に関しては、小さな教室を多数設けるのではなく、多様な学習形態に対応できるよう、まとまったスペースを必要に応じ区画して使用できる学習スペースにすることが必要です。また、ITを活用した授業が行われるよう、校内LANの整備を行い、必要な教室からインターネットに接続できるなど、情報化にも対応した空間を整備することも望まれます。この場合、コンピューター教室のように固定した机にコンピューターを設置するのではなく、必要に応じて移動できるなど、多様な学習形態に対応できるスペースを確保できるような配置が必要です。

このような趣旨から少人数指導やIT事業等に対応できるよう整備された学習スペース「新世代型学習空間」の整備が必要とされています。

(8) オープンスペース（多目的スペース）とクラスルームについて

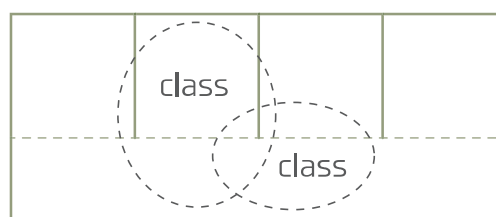
普通教室のあり方（オープン又はクローズ）については、学校職員へのヒアリング及び、児童・地域住民が参加したワークショップ、学校視察、地域懇談会での意見を基に検討を行いました。現在の古堅南小学校の教室はオープン型とクローズ型が混在しており、実際に学校を使用している先生や児童から「オープン型は隣の授業が聞こえるのでクローズ型がよい」といった意見がありました。しかし、周辺市町村の最新事例では教室と多目的スペースとの間にフルオープン可能な引戸を設け、利用状況に応じて開閉のできるセミオープン型の採用が多くみられます。先進事例校の視察を行い、実際の利用状況や運用面のヒアリングを行った結果、「開放と集中」を実現するセミオープン型を採用する方針とします。

開放時にはオープンスペース（多目的スペース）と一体となり、調べ学習やチーム・ティーチング等の学習形態に対応できます。また、引戸の他に可動式の棚も整備する事例もあり、さらに多様な開放形態を備えた学習スペースとすることも可能です。



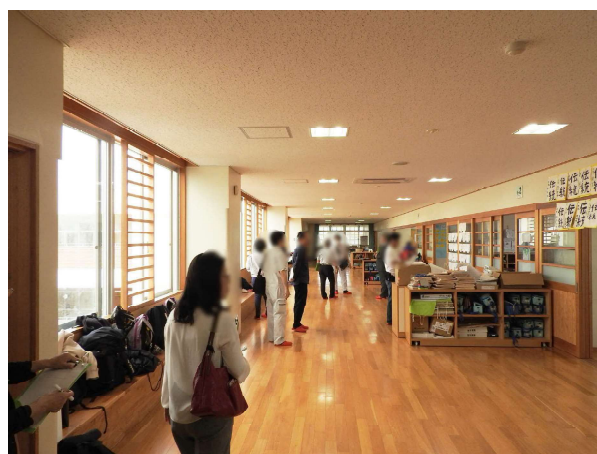
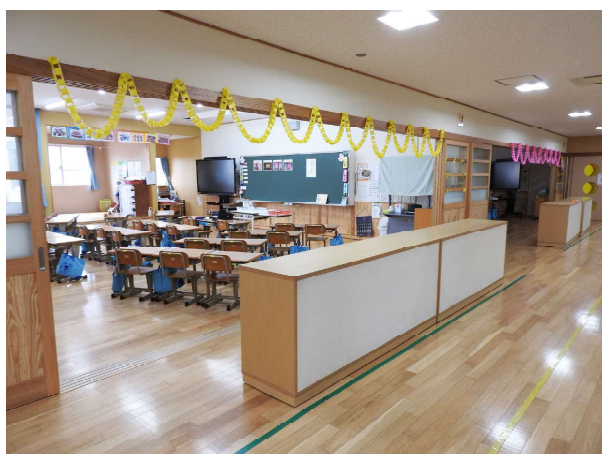
集中（クローズ型）

活用例：集中が必要な各授業
多目的スペースとの同時利用など



開放（オープン型）

活用例：多目的スペースまで一体とした
空間利用や他クラスとの
交流活動・学年集会など。



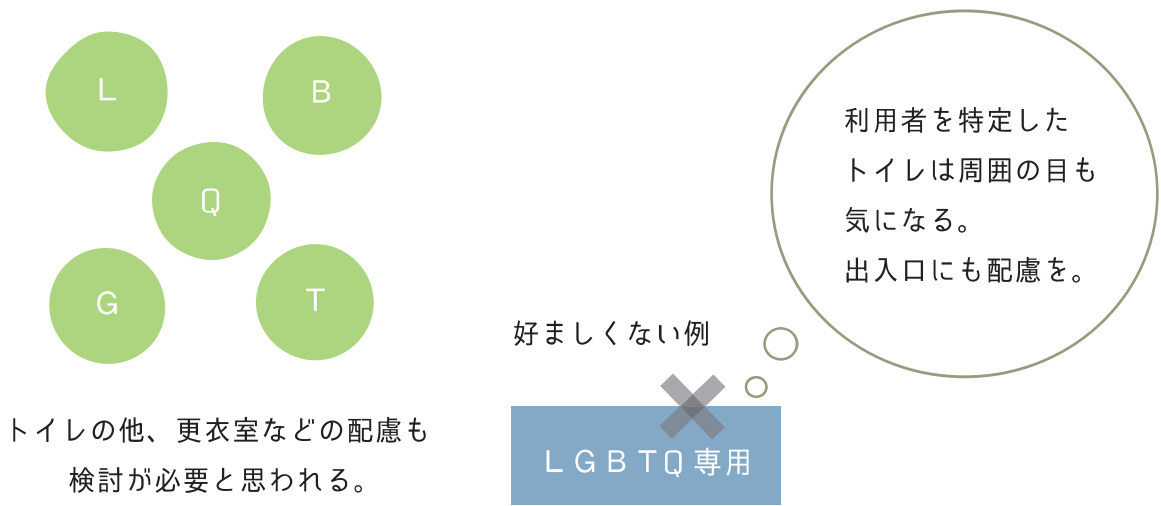
●セミオープン型の教室とオープンスペース（多目的スペース）の採用事例●

教師スペースを普通教室の一角に設けることで、児童たちが先生と関われる時間を増やす施設を目指します。

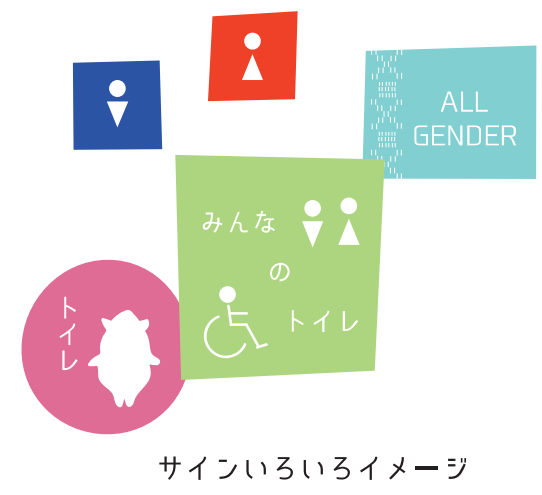
(9) バリアフリー、ユニバーサルデザイン、LGBTQ等について

敷地内及び施設内の段差の解消やスロープ、エレベーターの設置、多目的トイレの設置など、沖縄県福祉のまちづくり条例への対応はもちろん、地域に開いた学校として心身に障がいをもつ児童や高齢者も隔てなく受け入れる環境づくり（ユニバーサルスクール）を目指した計画とします。

また、近年、性の多様性（LGBTQ等）への配慮については学校現場においても喫緊の向き合うべき課題となっています。文部科学省は「性同一性障害や性的思考・性自認に係る、児童生徒に対するきめ細やかな対応等の実施について（教職員向け）」冊子の作成を行い、学校における姿勢や取り組み等を示しています。沖縄県においても平成27年3月に、県教育庁より「男女混合名簿導入の推奨について」の依頼文が各学校に出されるなど、運用面での取り組みが進んでいるところであります。施設改築に伴う学校施設での取り組みとして、「みんなのトイレ（P38参照）」の整備や、男女のイメージカラー（男の子は青、女の子は赤、など）にとらわれないサイン計画などの配慮を行う計画とします。



トイレの他、更衣室などの配慮も検討が必要と思われる。



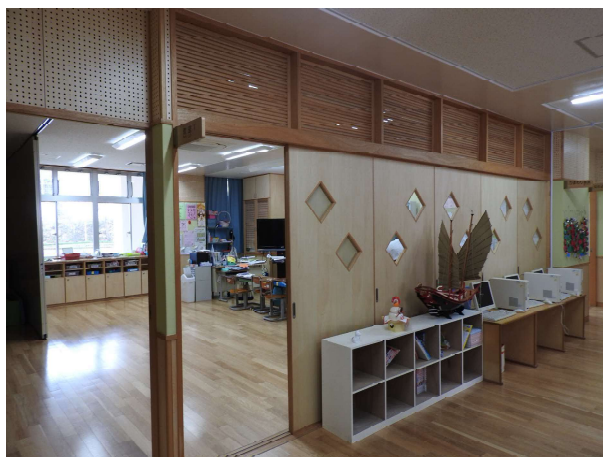
(10) 特別支援教室について

発達障がいのある子どもたちをはじめとした個別のニーズに対応し、より適切で効果的な教育を行うための特別支援教室は、運用のありかたやその配置計画について慎重に行う必要があると考えます。

ヒアリングによると、特別な配慮を必要とする児童は増える傾向にあるため、通級指導教室・特別支援教室（知的・情緒・肢体・難聴）の設置や、個々の特性に応じた対応が可能な個室の設置が望まれており、十分な面積（広さ）を確保し、きめ細やかな教育に対応できる施設計画とします。また、農作物や草花の育成などを行うことが多く、教材園へのアクセスや上下移動の削減を考慮し、1階に配置する計画とします。

インクルーシブ教育とは、子どもたち一人ひとりが多様であることを前提に、障がいの有無にかかわらず、だれもが望めば自分に合った配慮を受けながら、地域の通常学級で学べることを目指す教育理念と実践プロセスのことをいい、「一人ひとり丁寧に」と「みんなで一緒に学ぶ」の両方の実現を目指す教育理念といえます。

インクルーシブ教育の導入に向けては、多様な子どもが共に学ぶための基礎的な環境を整備することが必要であり、段差の解消やスロープ・エレベーターの設置など、移動する上での障害が極力少ない施設計画とします。また、子どもの障がいの程度、能力に合わせたきめ細やかな配慮に対応できる特別支援教室や普通教室など、多様な学び場の整備を目指します。



特別支援教室は個々の特性に応じた対応が出来るようにいくつかの部屋にわけて使用できるつくりとします。



特別支援教室の共有スペースには水まわりや畳間の設置が望まれます。

(11) 学校のトイレについて

トイレは衛生面で大きく分けて2つのタイプがあり、タイルで仕上げた床に水を流しながら清掃する従来方法の湿式（ウェット）清掃による湿式トイレと、固く絞ったモップ等で汚れを拭き取る乾式（ドライ）清掃による乾式トイレがあります。拭き掃除中心の乾式清掃には不安を感じて（水を流すとキレイになるという感覚的清潔感）採用に踏み切ることができないといった意見もありますが、科学的な衛生性については、湿式清掃のほうが乾式清掃よりも多くの「菌」が検出されており、さらに清掃後も菌数が増えています。これは床に残った水が菌の繁殖に最適な環境をつくるのが原因です。乾式の場合は排水口がないためにおいが軽減され、水や洗剤を使用しないため、すべり・転倒も少なく、節水効果もあります。以上の理由から乾式トイレを採用する方針としますが、汚れやすい低学年用トイレについては床を水で流すことに対応できるように、素材の選定や排水について配慮することとします。

また、トイレについては「LGBTQ」等への配慮から「みんなのトイレ」を設置する計画とします。今後の設計では教職員等や関係各課とヒアリングを重ね、「みんなのトイレ」の在り方や男子トイレを大便器のみとする完全個室化を検討するとともに、トイレに前室を設け、どこのトイレに入ったかが廊下側から見えづらくするなどの視線的配慮の検討も行っていきます。

● 湿式トイレと乾式トイレの比較

	湿式（ウェット）清掃	乾式（ドライ）清掃
衛生面	水洗いのため、乾燥しにくい。雑菌が繁殖しやすい。	湿度が低く、乾燥しているため、雑菌の繁殖を軽減できる。
臭気	床の排水口から、臭いが出やすい。	排水口がないため、臭いが軽減する。
快適性	床が濡れていて、ジメジメし、廊下も汚れやすい。	床はいつも乾燥し、廊下に汚れを持ち出さない。
安全性	水・洗剤等ですべる危険性がある。	すべり・転倒などが少ない。
清掃負荷	床面の水拭き、拭き取りに手間がかかる。	床面の水の拭き取り掃除の手間が省けるため、短時間ですむ。
維持管理	水で金具部分が錆びたり、木製部分及びブースが腐食する。	水による金具部分の錆や、木製部分及びブースの腐食を軽減できる。
バリアフリー	水の流出を防ぐために、段差ができる。	廊下との段差を無くすことができる。
節水	水をまくため、大量の水が必要。	水をまかないので、掃除につかう水の量が少なくてすむ。
工事費	防水工事、タイル工事があるため、工期も工事費もかかる。	防水工事がないので、工期の短縮及び工事費も軽減できる。

資料：TOTO

(12) 景観・環境（外観・ランドスケープ）について

建物外観については、読谷村景観計画に準拠し、周辺地域への高さの配慮（圧迫感の軽減）や沖縄らしさ・読谷村らしさを備えた調和のとれたデザインを目指し、外部や屋上に設置する機器（室外機やタンクなど）の直接的な露出を避ける計画とします。

本計画では、第一回地域懇談会にて発案されたコンセプトの一つである「南の森」の整備について、子どもたちの遊びや学びの場として十分な活用が見込まれるよう、その配置や規模の検討を行います。

実施設計においては、「南の森」の実現に向けて、現況の詳細な調査を行い、現況の樹木の移植や撤去、新たな植栽配置計画の検討を維持管理の観点も含めた総合的な外構計画として行います。現在の歴史ある樹木や珍しい野鳥も訪れる豊かな緑の環境を継承し、より発展・活用していくため、計画にあたっては専門家も交えた「南の森」づくりを行うことが望ましいと考えます。広々とした敷地を活かし、学校全体で森と共生し、豊かな環境教育の場として活用することが古堅南小学校の大きな特色になると考えます。



(13) 粉塵対策について

古堅南小学校の敷地は住宅街にあり、民家と隣接していることから、グラウンドからの粉塵対策は必須課題となります。現在、樹木や応急的な防砂ネットの設置による対策が施されていますが、必要十分とは言えない状況です。本計画では周辺住民への配慮から、さらなる対策を施す方針とし、実施設計において、必要な防球・防砂ネットの配置や高さ、構造の検討及び設計、大型スプリンクラーの導入、グラウンドの芝生化又は防塵処理剤の検討を行います。



(14) プールの配置について

小学校のプール施設は、水面積+プールサイド+管理諸室を含めると約 1,400 m²程度の面積が必要となり、全体配置計画の中でかなりの面積を占有することとなります。1階に配置した場合はグラウンドや周辺の樹木からの砂塵・落葉が入り込みやすく、維持管理の面で負担が大きくなることや、近年ではプライバシーや防犯対策として周囲から直接見えないよう、プールを校舎の屋上へ設置する例が増えています。本計画においても、これらの状況に鑑みて3階にプールを整備する計画とします。

通常の授業の他、休日の開放利用に対応するため、校舎内を介さず直接アクセスできる動線として屋外階段を設置し、また、車いす利用者等のためエレベーターや段差解消のスロープでのアクセスが可能な計画とします。

実施設計においては、災害時、緊急時の消防活動や中水利用のための水の供給源としての検討を行い、必要に応じて取水口やろ過装置及びポンプ機器等への接続を行う計画とします。

プールの材質は主にコンクリート製、ステンレス製、FRP製があり、それぞれのメリット・デメリットの整理、運用時のセキュリティ面、紫外線対策として庇、日除けシェードの設置等の検討を実施設計にて行います。



屋上プールの事例



日除け対策・プライバシーに配慮

(15) その他の事項について

●放課後子ども総合プラン

現在村内の小学校では、学校敷地内での児童クラブの整備を進めていますが、古堅南小学校区では平成13年に学校敷地内で事業を開始し、平成27年度には、隣接地にて「みらい児童館」が開設されました。しかし、定員制限のため毎年利用できない児童も20名余り見受けられるため、今後は学校施設を利用した児童クラブや放課後子供教室など、開放事業も推進されることが予想されます。本計画では、地域連携室の整備や南の森の開放など、子どもの放課後の居場所づくりに対応した施設計画とします。



●幼稚園との連携

古堅南幼稚園は敷地の南東側に位置しており、緊急時の駆け付けや防犯面などを考慮し、管理諸室を幼稚園との連携がとりやすい位置に計画し、通信設備等も充実させることとします。

●鳩（鳥害）対策

現在の校舎には、梁型や小庇、樋の横引き等鳩が巣を作りやすい形状をした箇所があり、鳩の糞によって衛生環境や美観が損なわれている現状があります。新校舎の実施設計においては、外部に梁型を出さない構造計画や小庇の形状、樋の位置等の詳細を検討し鳩の糞による害が発生し難い計画とします。

●サイン計画

校舎の内外に設置することとなる案内板や室名サイン等は、ユニバーサルデザインや沖縄県福祉のまちづくり条例、多言語対応、LGBTQ等への配慮の概念を取り入れ、沖縄らしさ、読谷村らしさを表現し、古堅南小学校を特徴づけるデザインのサイン計画とします。

基本計画

1. 施設配置計画－1

(1) 配置ブロックプラン

施設配置計画

施設配置計画を進めるにあたり、以下の諸条件に配慮しながら、敷地の有効利用等を図っていく計画とします。

● 周辺施設へ与える影響を考慮した配置計画

- a. 校舎による周辺住宅地への日影の影響について十分留意した計画とします。
- b. 周辺住宅地に対しての運動場からの砂塵・飛球に配慮した施設配置、植栽配置の検討を行います。また、散水設備、防塵ネットなどの導入も視野に入れた計画とします。
- c. 周辺住居に対しての学校を基因とする音（音楽室、体育、イベントなど）の影響に配慮した計画、相互にプライバシーに配慮した計画とします。

● 安全面・防災面に配慮した配置計画

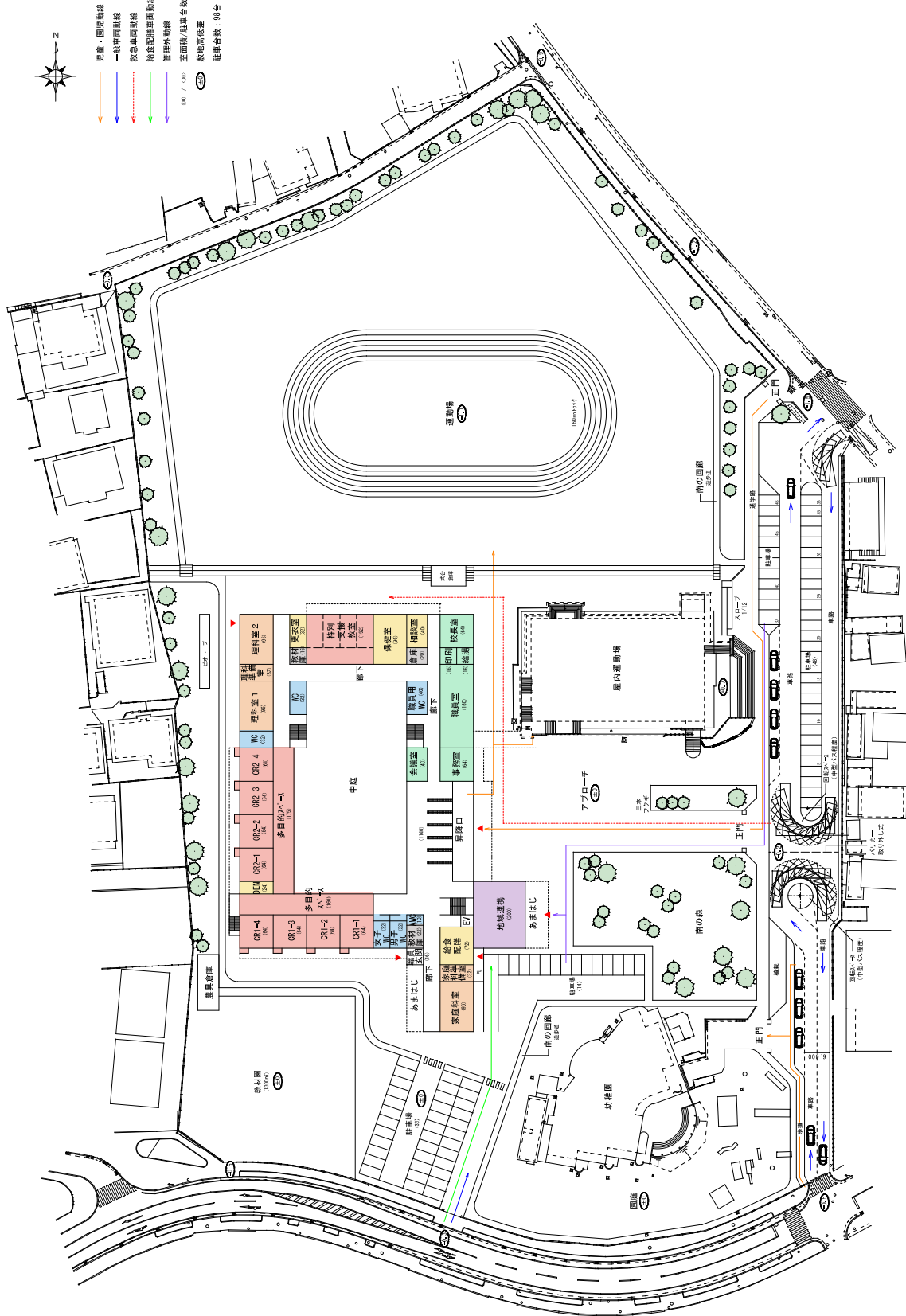
- a. 幼稚園との連携、将来計画を考慮した計画とします。
- b. 大木古堅線の駐車場出入口と横断歩道の位置及び、ハイビスカス通り（歩道）と駐車場についての安全対策を行う計画とします。
- c. 総務課と連携し、災害時の避難動線、避難施設として望まれる整備を行う計画とします。また、備蓄倉庫の整備や避難場所（体育館を想定）までのバリアフリー化等の整備を行う計画とします。

● 景観計画、自然環境、沖縄の気候風土の影響を考慮した配置計画

- a. 地域の景観に配慮し、地域のシンボルとして親しまれるよう、周囲の街並みに調和した配置計画とします。また、広大な敷地条件を活かし高さをおさえた2階建て施設の検討も行います。
- b. 現在の豊かな自然環境（歴史ある木や珍しい野鳥のいる環境）を活かし、緑豊かな学校施設の計画を行います。
- c. 沖縄の気候・風土を考慮し、通風や日当たり、日除けに配慮した施設配置を行います。

● 建替え計画について

- a. 建替え配置計画や建替え順位の計画の際は、プレハブ校舎の利用計画や経済比較、工事中の児童の学校生活、安全面や周辺地域に配慮した計画の検討を行います。
- b. 将来の敷地利用計画（幼稚園・体育館の建替えなど）も視野に入れた配置計画を行います。



1F PLAN

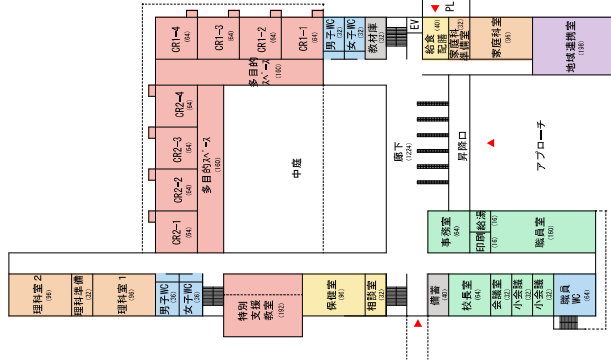
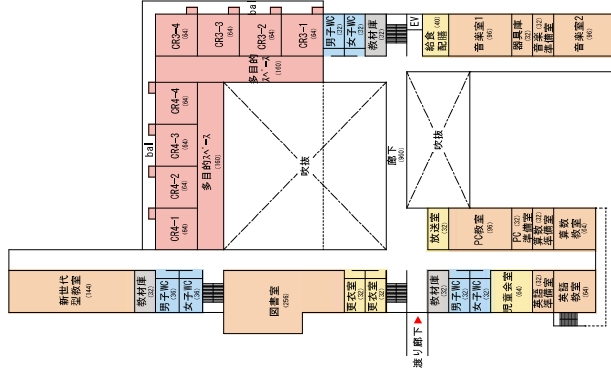
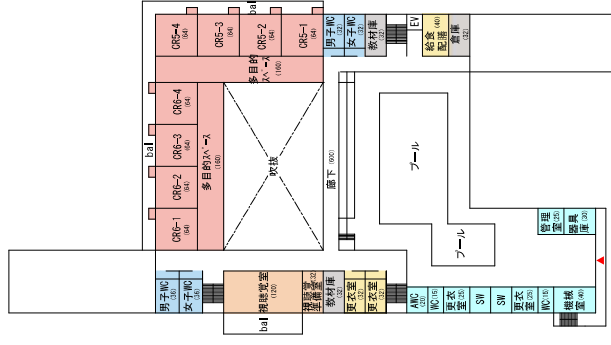


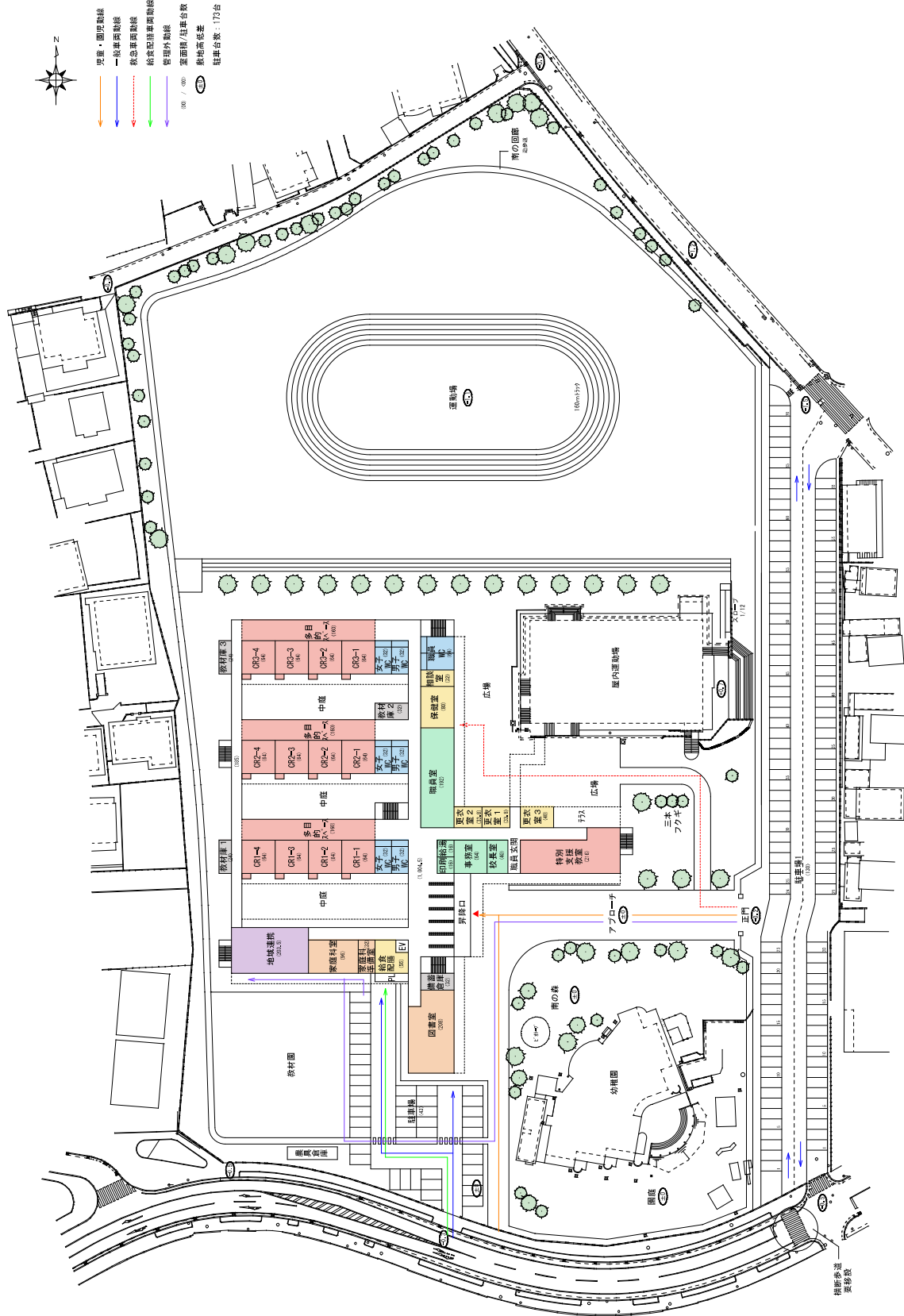
1F PLAN





- 児童・園児動線
- 一般児童動線
- 教員・職員動線
- 緊急避難動線
- 給食配膳基面動線
- 管理外動線
- (00) / (00)
- (00)
- ◎ 敷地高低差
- 注：舞台：117台





- 児童・図画動線
- 一般車動線
- 緊急車両動線
- 校舎配車庫動線
- 管理外動線
- 運動場/駐車場
- 敷地面積
- 柱間台数: 172台

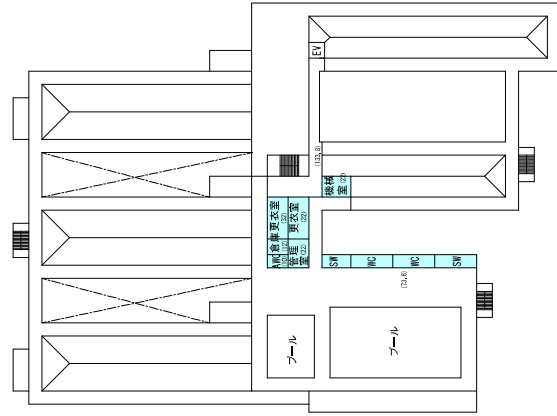
1F PLAN



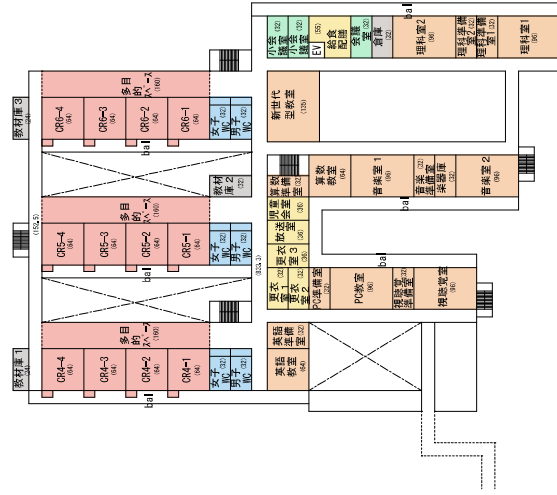
1F PLAN



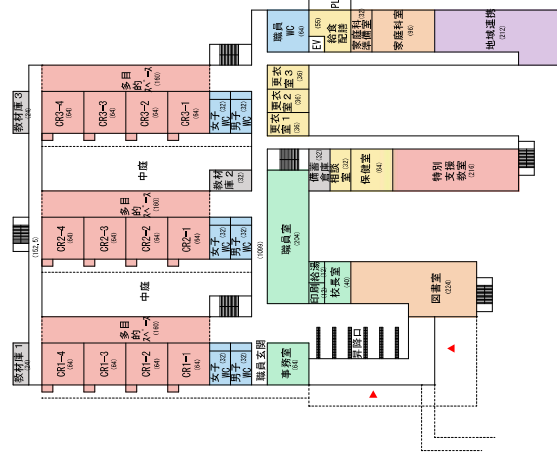
- 児童・児童数線
- 一般運動動線
- 緊急直向動線
- 緊急配膳基面動線
- 管理外動線
- (00) / (00)
- Ⓢ 敷地高低差
- 註：階台数：102台



3 F PLAN

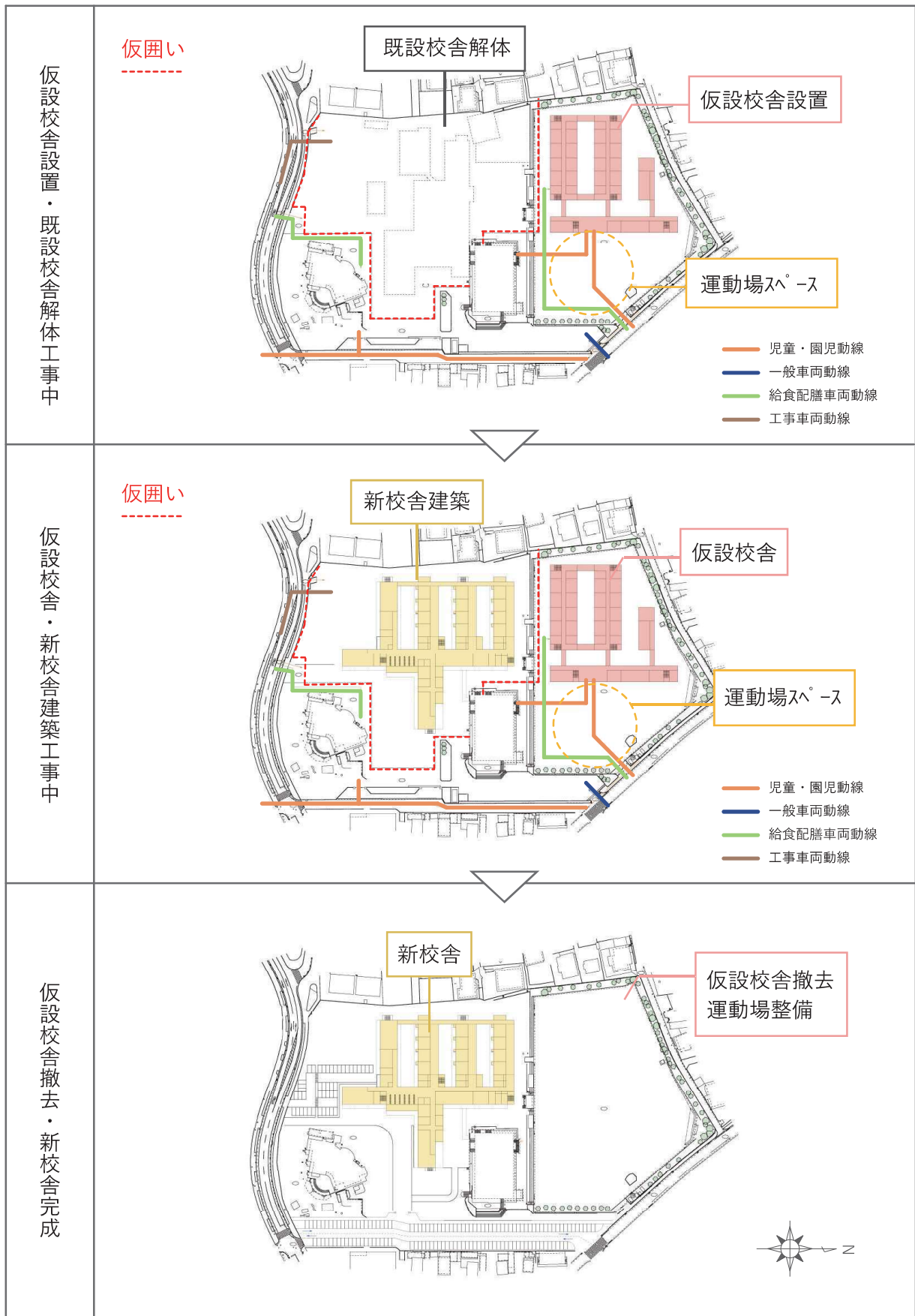


2 F PLAN

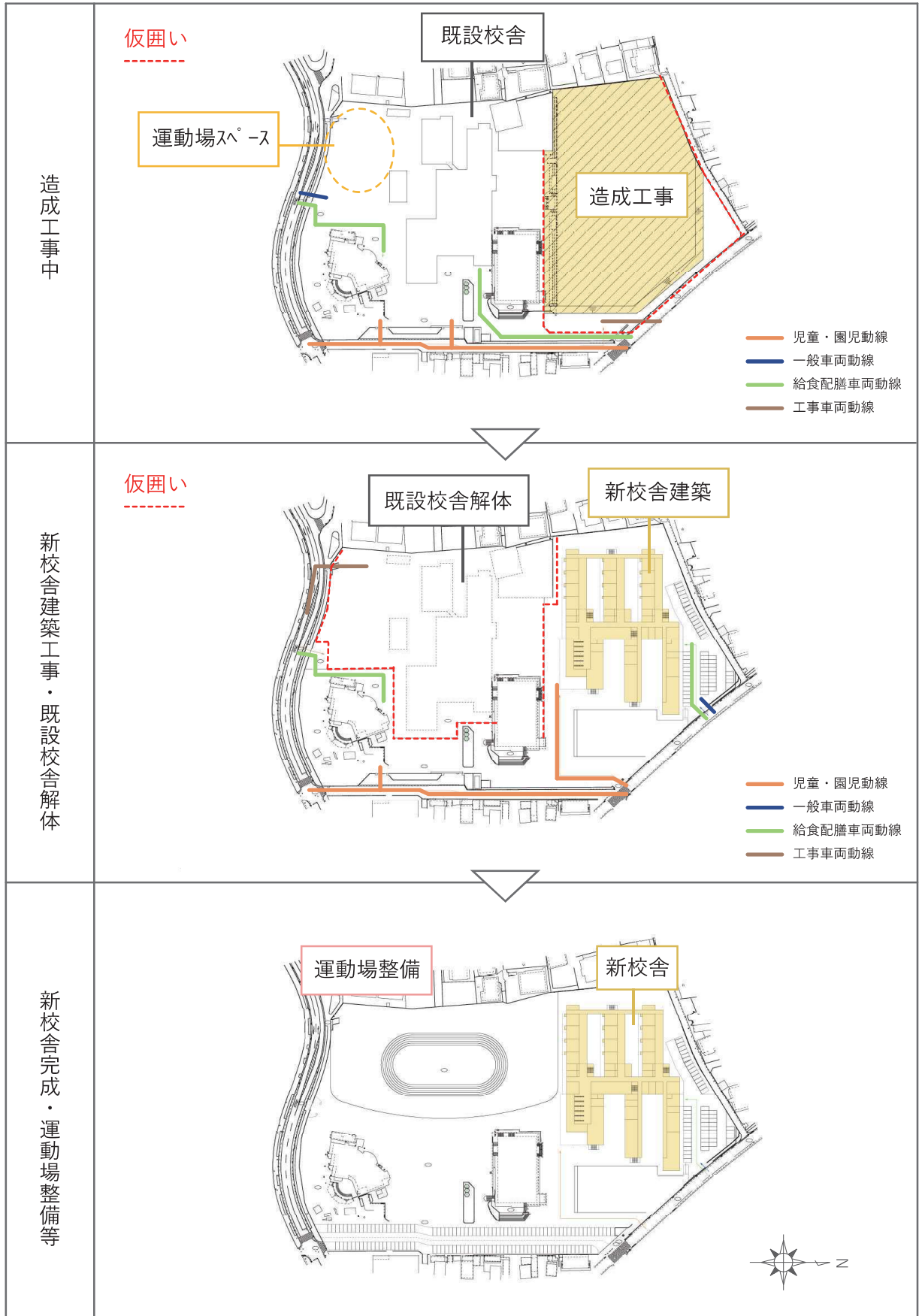


1 F PLAN

(2) 工事工程図（・仮設校舎が必要 D案の場合）

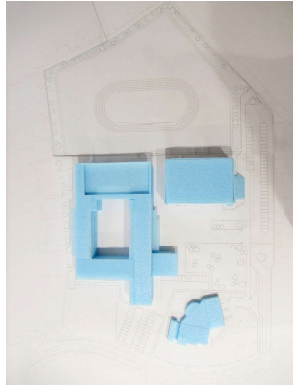


工事工程図（・造成工事が必要 E案の場合）



● 模型写真

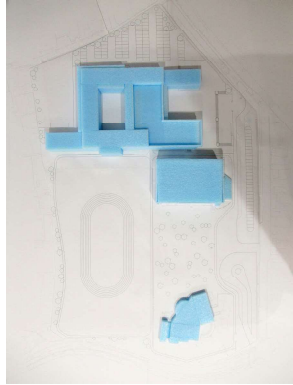
A 案



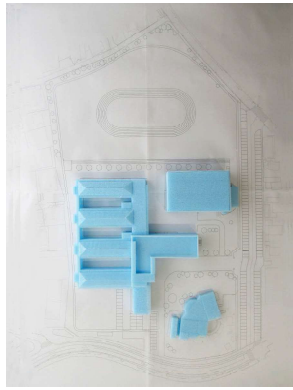
B 案



C 案



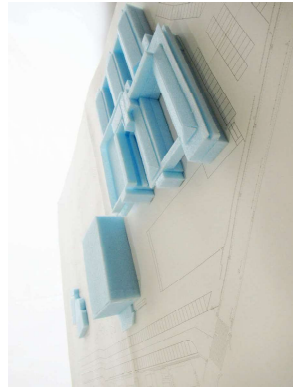
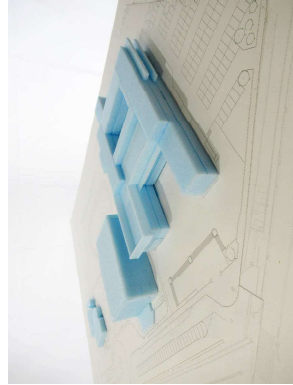
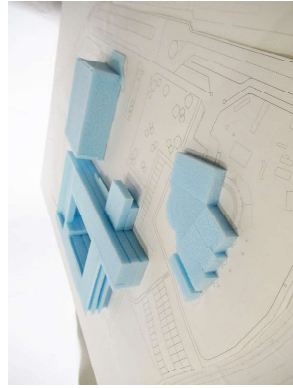
D 案



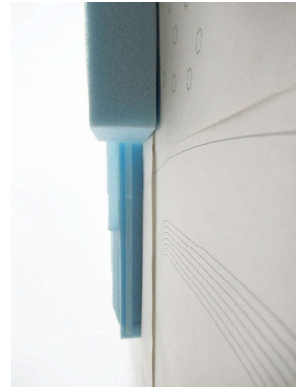
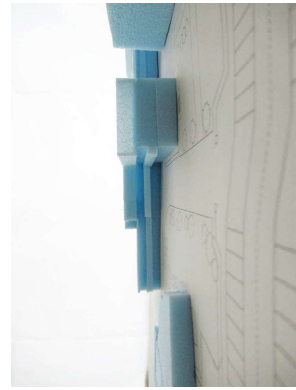
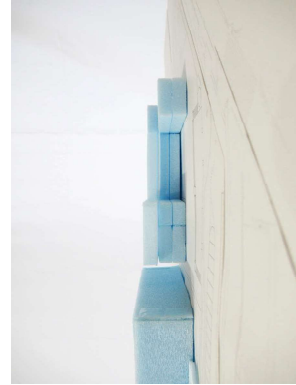
E 案



鳥瞰 (真上)



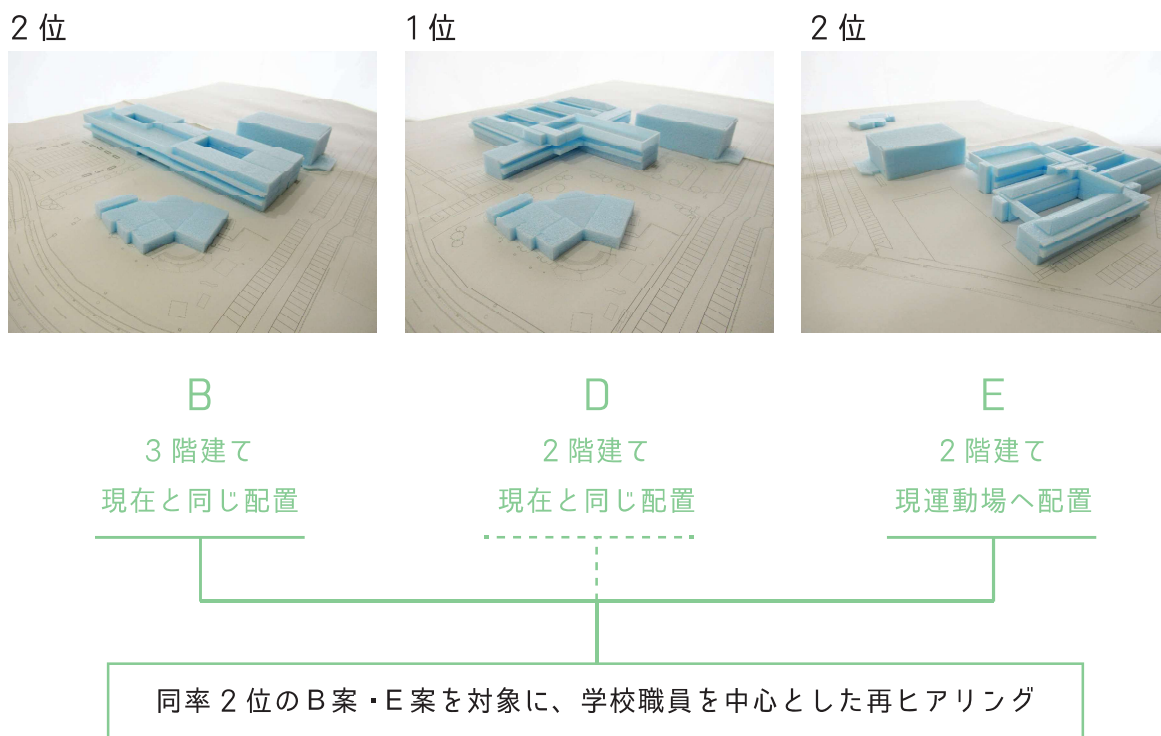
鳥瞰



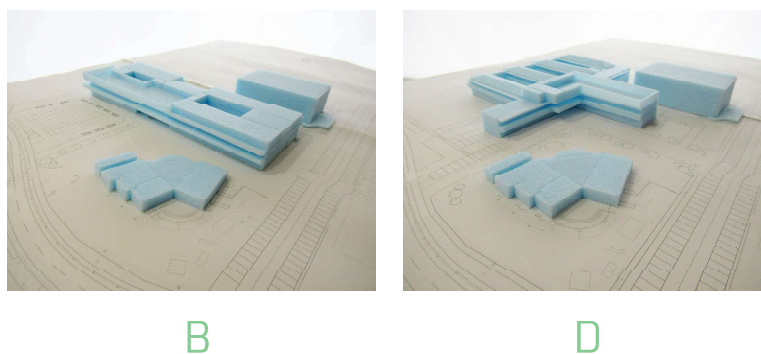
アプローチ側立面

●一次比較まとめ

A～Eの5つのプランにて比較検討を行った結果、1位：D案、2位：B案・E案（同率）となりました。



同率 2 位の B 案、E 案について、学校職員より使い勝手や運用面などの意見を頂きました。E 案は仮設校舎が不要となり、経済性では優位となるものの、幼稚園との連携、特に、安全面・管理面においてのデメリットが大きく、校舎と園舎が離れることにより学校敷地へのアプローチ（出入口）が複数になることが懸念され、各施設のまとまりが良く、安全管理が行いやすい B 案の配置が優位となりました。



以上の検討結果から、B 案、D 案を最終候補（二次比較）として比較検討を行うこととします。

2. 施設配置計画－2

(1) 配置ブロックプラン（改良案）

二次比較を行うにあたり、再度行った教職員へのヒアリング結果やこれまでの意見・要望を精査し、一次比較によって選出された2案へ反映させた改良案、B案（改）・D案（改）を作成しました。

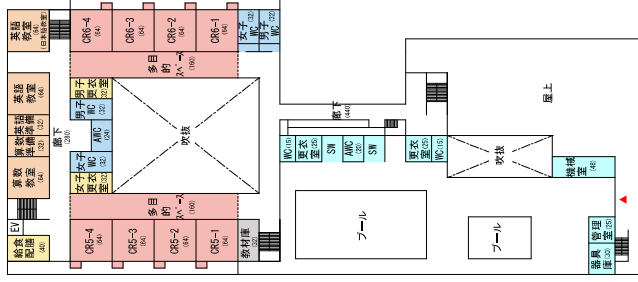
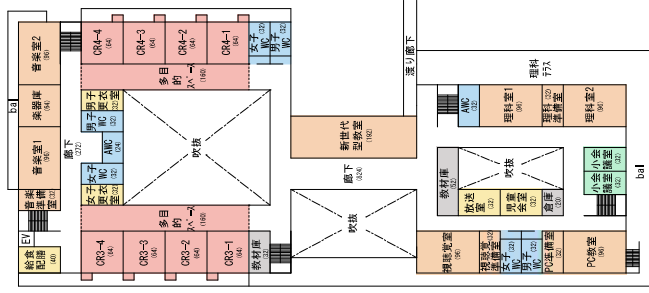
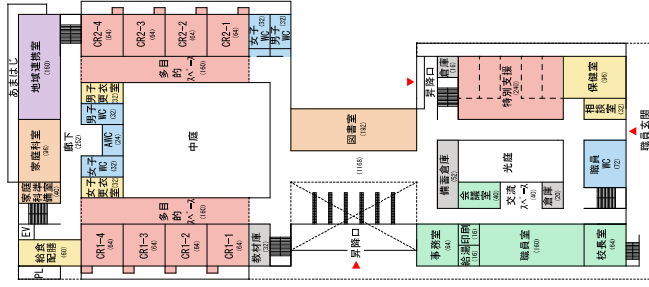
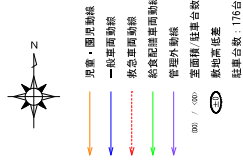
主な改良点は、低学年（1・2年）、中学年（3・4年）、高学年（5・6年）のゾーン分けを明確にし、それぞれが1つの階に配置されるよう修正したこと、様々な活動が想定される中庭を広くしたこと、正門の位置を来校者がわかりやすいよう県道がある南側に統一したこと、南の森と校庭との連携を取りやすくしたこと。

また、ハイビスカス通りは、これまでどおり車両の進入を禁止し、村道と県道を結ぶ歩道及び児童館への動線を整備し、隣接する駐車場との間にはガードレールやフェンスを施すことで明確な歩車分離を行い、安全を確保する計画としました。

これらの改良を行ったB案（改）とD案（改）の比較検討を行い、基本計画における1つの最終案を決定します。

室名	室数	面積
ファミール	24	1,538.0
多目的ホール	6	902.0
特別支援教室	1	240.0
理科室	2	192.0
理科実習室	1	32.0
家庭科室	1	96.0
家庭科準備室	1	32.0
音楽室	2	192.0
音楽準備室	1	32.0
図書室	1	96.0
PC教室	1	96.0
PC準備室	1	32.0
新社会科教室	1	192.0
福祉教室	1	96.0
福祉教習準備室	1	32.0
英語教室	2	192.0
英語準備室	1	32.0
算数教室	1	64.0
算数準備室	1	32.0
車庫	1	64.0
職員室	1	160.0
印刷室	1	16.0
給湯室	1	16.0
吹奏室	1	64.0
会議室	1	40.0
小会議室	2	64.0
教師ホール	24	85.5
受給室	1	96.0
相談室	1	32.0
給食調理室	3	140.0
児童食堂	1	32.0
放送室	1	32.0
更衣室	3	204.0
男子・女子トイレ	7	448.0
ABC	4	104.0
職員待合	1	72.0
教員庫	4	148.0
倉庫	3	56.0
備置倉庫	1	52.0
交通ホール	1	40.0
廊下・階段・その他	3	260.0
合計		9,472.5

プール	203.0
地域整備	160.0



(2) 二次比較

古堅南小学校校舎改築基本計画
基本計画ブロックプラン（配置計画案）比較検討

	B案（改）		D案（改）	
全体計画	現校舎とほぼ同じ配置に8の字型プラン。3階建て。幼稚園と体育館の間を使い長手方向を東西に。	—	現校舎とほぼ同じ配置に連棟プラン。2階建て（プール部分のみ3階建て）	—
室の配置	1階に管理諸室と図書室、理科室、地域連携室、家庭科室を並べて配置。小・中・高学年のゾーニングがとれている。	◎	1階に管理諸室と図書室、理科室、地域連携室、家庭科室を並べて配置。小・中・高学年のゾーニングがとれている。	◎
動線計画（外部）	昇降口へのアプローチはバランスがとれている。歩車分離。校庭へ出る昇降口を設置。	○	昇降口へのアプローチはバランスがとれている。歩車分離。校庭へ出る昇降口を設置。	○
動線計画（内部）	校舎内の移動距離：児童約66m、教員約109m、階段×2	○	校舎内の移動距離：児童約102m（1階は約86m）、教員約77m（1階は55m）、階段×1	○
安全性 防犯性	歩車分離が可能。死角は少ない。幼稚園との距離が近く連携しやすい。	○	歩車分離が可能。死角は少ない。職員室からの視認性が良い。幼稚園との距離が近く連携しやすい。	◎
室内環境	普通教室は南・北向き。特別教室は西向き・北向きが多い。	△	普通教室は南向き。特別教室は南向き・北向きが多い。	◎
外部環境（南の森）	校庭と南の森との連携が可能。	○	校庭と南の森との連携が可能。	○
外部環境（校庭）	校庭の広さは変わらない。	○	校庭の広さは変わらない。	○
周辺環境（敷地外）	3階建の高さとなるため、日影や圧迫感（特に西側隣地）による影響が予想される。	△	2階建の高さとなるため、日影等の影響は少ない。瓦屋根を設ける等景観への対応が可能。	○
駐車場	県道側及びバイパス通りに配置。（駐車台数：176台）	◎	県道側及びバイパス通りに配置。（駐車台数：172台）	○
仮設校舎	仮設校舎の設置が必要。	△	仮設校舎の設置が必要。	△
施工性	現校庭に仮設校舎のプレハブを運ぶため、村道を通ることになる。校舎の建設及び解体は県道側から可能。	○	現校庭に仮設校舎のプレハブを運ぶため、村道を通ることになる。校舎の建設及び解体は県道側から可能。	○
造成計画	造成工事は不要。	○	造成工事は不要。	○
工期	仮設校舎設置の工期を見込む必要があるが、造成工事の工期を省ける。校舎が3階建てとなる。	○	仮設校舎設置の工期を見込む必要があるが、造成工事の工期を省ける。2階建て一部3階建てのため工期短縮となる。	◎
経済性	仮設校舎：¥520,000,000 造成工事：¥0 校庭整備：¥158,530,000 本体工事：¥3,320,000,000 合計：¥3,998,530,000	×	仮設校舎：¥520,000,000 造成工事：¥0 校庭整備：¥156,260,000 本体工事：¥2,915,000,000 合計：¥3,591,260,000	○
得点	25		31	
順位	2位		1位	

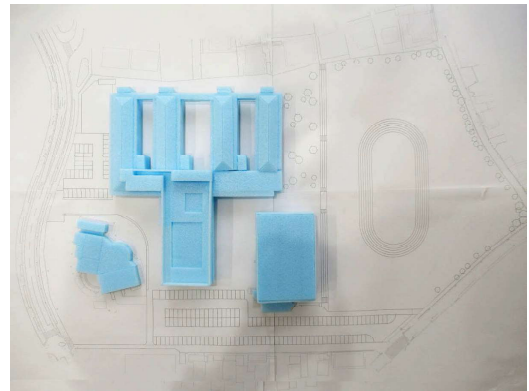
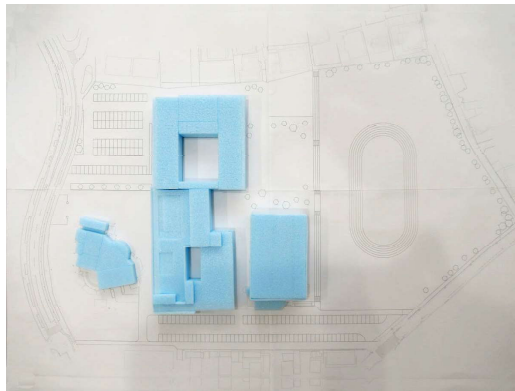
◎：3点 ○：2点 △：1点 ×：0点

●模型写真

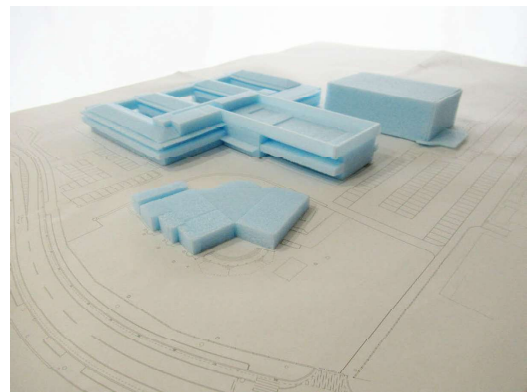
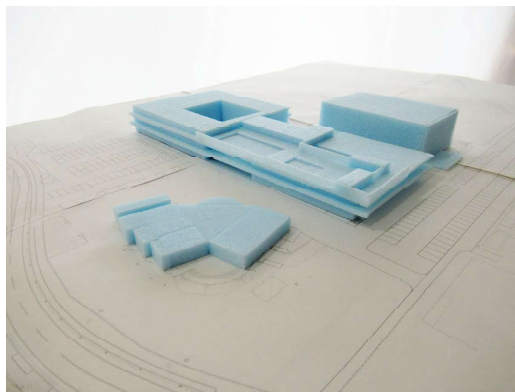
B案(改)

D案(改)

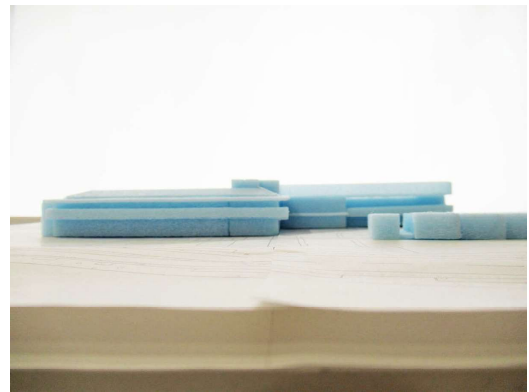
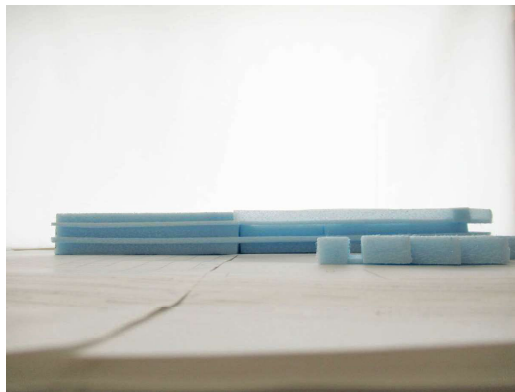
鳥瞰(真上)



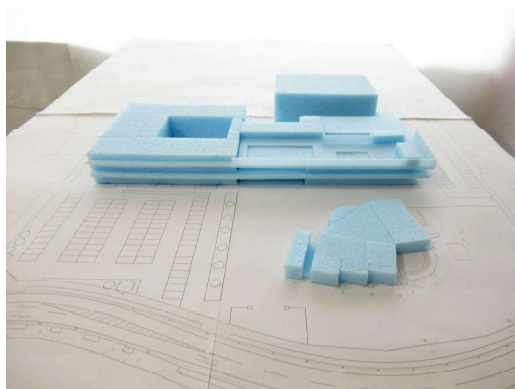
鳥瞰



アプローチ側立面



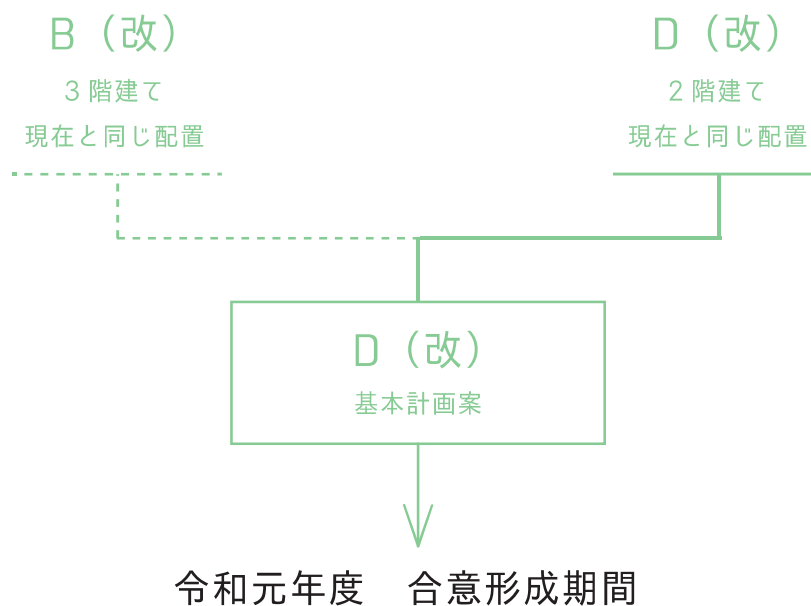
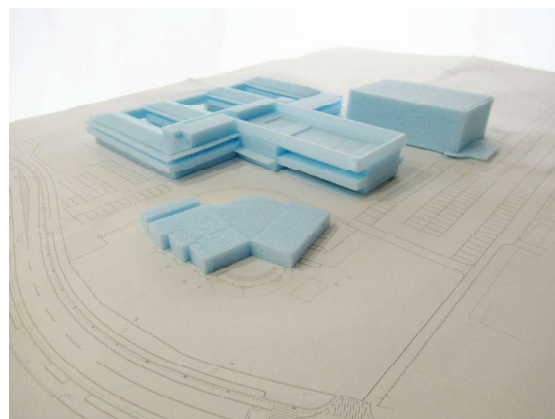
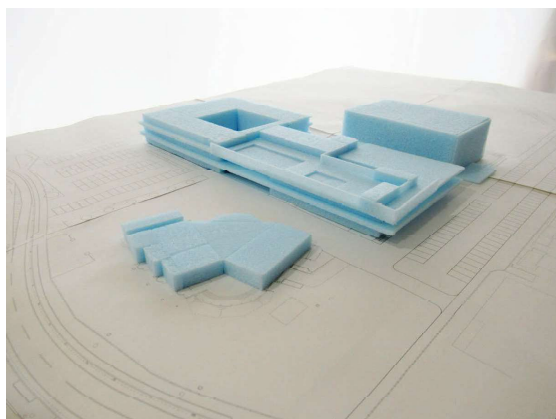
南側鳥瞰



●二次比較まとめ

B案（改）、D案（改）の比較検討を行った結果、各室の配置や動線、敷地内の外部環境には大きな差はありませんが、2階建てであるD案（改）の方が、床面積が少ないことなどから経済性・工期の面で優位となります。また、3階建てであるB案（改）に比べて建物の高さを抑えることができるため、周囲への圧迫感の軽減につながり、絶対高さ制限のある第一種低層住居専用地域に建てる建築物として、周辺環境への影響という観点からD案（改）が優位と考えられます。そのほか、D案（改）の職員室の配置は窓越しに各外部を視認することができるため、安全性・防犯性が高いといえます。

これらの総合的な比較検討の結果、「D案（改）」を基本計画案とします。



3. 今後の課題

基本方針に基づき、今後の検討課題をまとめます。

(1) 事業計画の周知、合意形成

本計画を関係各所へ周知を行い、計画内容の合意形成を行う。次年度の実施設計発注に向け、関係各所へ丁寧な説明を行い、滞りなく計画の合意を得られるよう努めることが必要である。

(2) コスト縮減対策の検討

厳しい財政状況の下で良質な学校校舎の建築を行っていくためには、コスト縮減対策を検討することが不可欠となっており、工事コストの低減だけでなく、工事の時間的コストの低減、品質の向上によるライフサイクルコストの低減等についても取り組むべき課題となっている。基本計画では、概算工事費や工事期間の比較を行い基本計画案の策定を行った。実施設計段階においては、採用する建材や設備機器についてのイニシャル・ランニングコスト、製造から廃棄までのライフサイクルコストの検討、無駄を省き、再資源化や最新技術の導入等の検討を行い、長寿命で良質な校舎の建築を目指す方針とする。

(3) 実施設計での詳細の検討

本計画で頂いたご意見・ご要望の中で実施設計段階での詳細な検討が必要とされるものについて、項目の整理を行い、必要に応じて関係各所と調整を行いながら、実施設計に反映させていくこととする。